

## 大会レポート

# ねんりんピック2019紀の国わかやま

2019年11月10日（日）

11月8日（金）

いよいよその日がやってきた。「ねんりんピック2019紀の国わかやま」への出発の日である。

第1日は岐阜駅前じゅうろくプラザ集合。「ねんりんピック2019紀の国わかやま大会」へ参加する岐阜県選手団は総勢165名。貸切バス6台に分乗して大阪へ向けて出発した。順調に吹田までは進んだが、そこから先はかなりの渋滞で予定より遅れて初日の宿舎「アートホテル大阪ベイタワー」に到着。40階以上もある高層建築である。部屋もゆったり、設備も整い、窓からは大阪港方面の夜景が望める快適なホテルであった。残念だったのは夕食。バイキング1回目は、ご馳走に並ぶ行列が大渋滞。ようやく料理にたどり着いたが、後ろの人に遠慮して控えめに皿に盛って席に帰る。これからは勝負と2回目に向かうが、すでに何も料理が残っていない。バイキングなら次が出てくるかと思ったが、本日打ち止めとのアナウンスがある。1回でおしまいのバイキングなんて初めての体験。誠に残念な初日であった。



11月9日（土）

翌朝早く6:00起床。和歌山へ向かう。海岸沿いに国道4号を走る。大阪湾から瀬戸内海方面の眺めを楽しみながらの快適な旅である。遠く神戸六甲の山並み、遠く淡路島、明石海峡大橋も望める。車中で朝食弁当。これは、味も、量も十分満足であった。

中央構造線を横断して総合開会式会場の紀三井寺運動公園へ到着。名前は、よく聞くところである。山並みを背に野球場、陸上競技場などが配置されている。いつもの習性で、ここでスプリントオリエンテーリングができないかと妄想に浸る。

9:30より開会式が始まる。まずは、第1部が行われている



その間、選手団は、補助競技場で待機である。10時選手入場開始。岐阜県は38番目である。スタジアムの入り口には、子どもたちが列を作って迎えてくれる。入場後開会式式典、その後、選手団はスタンドに誘導されて、おもてなしのアトラクションを見る。申し訳ないが、弁当を食べながら演技を見させていただく。昼食弁当も豪華で大満足。出演者たちの一生懸命な姿に感銘を受ける。そして、坂本冬美登場。残念ながら遠すぎて実物ははっきり見ることはできない。大型スクリーンを映る姿を鑑賞する。

こうして盛大に大会を盛り上げていただくのには感謝するがこんなにお金と労力をかけていただくことに申し訳ない思いでいっぱいである。

総合開会式後、種目ごとに用意されたバスで本日の宿舎に移動する。選手団の監督だけは、別のバスで監督会議の会場に向かう。

かつらぎ町は、中央構造線の底を流れる紀ノ川沿いの平地とその両側にそびえる山塊の斜面に細長く帯のように広がっている。町の最も低いところと高いところの標高差は、900m以上ある。

さて、監督会議であるが、主に競技に関する情報を説明する場のようなのである。特に、トレイン内に高野山への参詣の古道である三谷坂が通っており、世界遺産になっているそうである。そのため走って通行することはできないのである。そこを横切る際の通り抜け地点の説明には時間をかけられた。せつかくそういう場を設けていただいたのだが、この内容を宿舎に帰って監督が選手に伝えるわけである。正直、オリエンテーリング界の通例のようにプログラムに記述してもらうだけで事足りると感じた。または、一度に全選手に説明する場にして欲しかった。実際、宿で岐阜県選手団に一生懸命伝えたつもりだったが、きちんと伝えられなかったように思えた。監督会議終了後、高野山の宿で合流するまでの時間差も随分できてしまうので来年の岐阜大会では改善できると良い。

会場となる天野地区を過ぎて高野山までは、1時間以上かかる。ここでようやく岐阜県選手団の川島さん、志方さんと合流。宿は恵光院という宿坊



である。宿坊というイメージから想像するより綺麗で、快適で、外国人観光客が喜びそうな雰囲気のある宿である。精進料理の夕食も心配だったが、味も量も充実していて大満足であった。標高約1000mの山上の聖地高野山の夜は寒くもなく大変快適に眠ることができた。

ものすごく急峻な斜面に肝をひやす。もしも道を外れたら命はないだろう。交通不便な時代、ここへたどり着くには大変な苦勞があったのだろう。それを押してまで高野山まで詣でようとする信仰の力とこのような山上に寺院を中心に大きな街を作ったという偉業に感嘆してしまう。

会場となる天野地区は、高野山へ続く稜線と、紀ノ川との中腹に開けた里である。中心には世界遺産丹生都比賣神社が鎮座する。紀伊國一之宮ということなので和歌山県で一番の格式ということである。この神社の駐車場が



11月10日（日）

いよいよ大会当日である。朝6時起床、7時40分、宿坊を出発、送迎のバスに同宿の選手たちが乗り込む。

ここからは、会場のかつらぎ町へ戻る形になる。昨日は、細くてくねくね曲がった道だと思わなかったが。明るくなってみると



オリエンテーリング開会式の特設会場である。開会式は、町長さんの挨拶、和歌山県選手団による選手宣誓など短時間で行われる。選手にとっては、ありがたい。天気も良く、快適な気温である。

開会式後、スタート地点へ移動する。世界遺産の三谷坂は、言われなければわからないごく普通の山道である。こういうものが世界遺産に指定されるというのも意外な感じがするが、かつ



てここをってあの高野山に詣でた人々に思いを寄せるというのも意味深いことなのだと感じる。

スタート地区は、その山道を少し外れた尾根の鞍部に置かれてあった。下草がなく快適に走れそうな杉林である。

スタート直後、急登であるがねんりんピック選手の中では自分は若手なので、無様な走りにはできない。気合を入れて駆け上る。1へはコンタリングぴったり。2はちょっと高さを読み間違え2分ほどロスか。三谷坂の横断では、多くの選手が混乱しているようである。福島のランナーと張り合うが気が湧かず、徐々に離される。これが自分の今の一番の問題点だとはわかっているが、克服できない。しかし、スピードが落ちる分ミスなく順調に

コントロールをチェックしていく。三重県の伊藤哲夫氏に追いつく、かつてはライバルであったけど勝った記憶がない。どうやら大きなミスをしたようだ。氏も最近はあまり大会に参加していないので、やはりレース勘が戻らないようだ。あとは、抜きつ抜かれつ、せめて下りは、もう少しスピードが出せたと反省。最後は、田園の中をゴールに向かう。大勢のスタッフが声援に迎えられて無事フィニッシュ。とても楽しく走らせてもらうことができた。

フィニッシュと閉会式の会場の「ゆずりは」は学校の跡のようだ。どこも子ども的人数が減っているのだろう。今は、統合された遠くの学校までスクールバスで通っているのだろうか。昔へき地の学校に勤めた自分はこういう廃校を見ると寂しい思いがする。運動場にテントが並び、イノシシ鍋、地元特産の果物などのもてなしなど、本当に大勢の人がこの大会のために一生懸命携わってくださることに驚く。おそらく参加者より多くのスタッフが大会を支えてくださっているのではないだろうか。

さらに、閉会式では、地元の伝統芸能が披露され、表彰が行われた。残念ながら私たち岐阜県代表は入賞とはならなかったが、川島さんが最高齢者賞を贈られた。その記念の品も漆塗り

の立派な盾であった。

今回の都道府県対抗のルールは S,M,L(距離の違いにより、ショート、ミドル、ロング) の3コースを、チームの3人で分担して走る。その順位を得点化して合計得点を来と競うという方式で行われた。女子も男子も60歳も80歳も同一のコースで争う。同じコース性別と年齢で得点にハンデをつけてあるもののこの方式の妥当性は疑問である。実際、Sクラスは19人中完走者10名(53%)、Mは19人中13名(68%)、Lは20人中13名(65%)というデータから見ても、年齢と技術レベルにあったクラスを走ることができなかった選手が多かったということになる。中には、オリエンテーリング経験がほとんどない方も参加されていたので、あまりに無理があったと言える。レースそのものは、走りやすい森、険しい斜面だが登りが多くなならないように組まれたコースでスピードも出しやすい。技術的にもミドル種目のガイドラインに沿っており、気持ちよく走れた。地図もとても正確で見やすいものであった。M65Aを基準に組んだと説明してあったが、S,M,Lとも優勝設定タイムにほぼ近いタイムが出ている。ただ、これは日常的にオリエンテーリング競技に参加している者にとっての話であって、経験の少ない人やブラン

クのある人にとっては、かなり苦行であったと思われる。

そして、得点算出方がわかりにくいということ、表彰式で得点発表もないということも残念であった。

それにしても、この大会のために驚くほどの数の皆さんが色々なところで大会を支えていてくださった。閉会式後は、全員が列を作って見送ってくださった。本当にこれだけの舞台を作ってくくださったことには本当に感謝する。

今回和歌山県の尽力で復活したオリエンテーリング。来年は、岐阜県での開催は、それをより



良い形で受け継ぎ、次の神奈川に引き継いでいこうと強く感じた。

帰りは、視察団の車(牧ヶ野車)に乗せてもらって岐阜駅まで送っていただいた。まるであの伝説のFIドライバー故アイルトン=セナが憑依したかと思えるほどのドライビングテクニックで次々と前の車をオーバーテイクしていく。おかげで最終の特急ひだに余裕で間に合い、その日のうちに高山に帰りつくことができた。

(橋本 八州馬)